

東北の思い出

元東北地質調査業協会広報委員会委員長
サンコーコンサルタント(株)営業本部

阿部 征二



21世紀を目前にした仙台での4年間は、誠に意義深い経験でした。赴任したのが平成8年10月。朝晩の冷気を含んだピリッとした空気と懐かしい東北弁に、盛岡生まれの私は故郷にもどったような気持ちになったものです。

ほのぼのとした気持ちになりながらも、あの時点ではまだ、東京での生活をひきずったまま、ずいぶん力んでいたように思います。

東京で大学を卒業したのが東京オリンピックの翌年の昭和40年春。高度経済成長の波に乗り「大きいことはいいことだ」と、ゆとりなく業績を追い求めた30年でした。東京に住んでいた頃は当たり前の光景であったのに、仙台を拠点にするようになって改めて感じたことがありました。

仙台に赴任後、上京した折りのこと。高層ビルの最上階のレストランから下を眺め、新宿駅に往来する人の多さにただ、ただ驚いたことを覚えています。まさに、泉が湧きでるがごとくでした。

さすがに世界有数の大都市、巨大経済圏であることを再認識しました。このような見方も、人口が多ければ税収が増える、増えれば公共事業が増える、増えれば私たちの仕事が増えるとの論で、人の多さがすぐに経済圏と直結する発想は、会社人間の性でしょうか。

東京には東京の、東北には東北の仕事のやり方があるはず、とそのとき、気づいたのでした。

地方自治体の財政が困窮している現在は特に、経済圏の小さい東北では、東京と同じような発想では財政負担が重くなりすぎ、次世代に負担を残すことになりかねません。

20世紀は、大きいこと新しいことが良いこととばかりに、その考え方や行動は、地方の文化・

風習までも飲み込んできました。しかしこれからは、地域の人たちが、地域のあり方を振り返り、その土着文化と思想で自然環境・農業・地域の個性を十分に生かし、地に足がついた「個性」を改めて見直し、尊重する時代になるのではないのでしょうか。それは私を育ててくれた昭和20～30年代の故郷のように「人」に優しい、癒しに回帰するのではないのでしょうか。

そのためには、地域全体がゆっくりでも孫子の世代に向けて継続的に発展させなければなりません。経済の活性化とは経済の永遠なる波及効果を伴うものでなくてはならないはずです。

地域の活性化とは、都市部との交流を抜きにしては考えられません。その交流を必要としているのが、いわゆる中山間地や過疎地です。郡部の都市も駅前通りは、シャッター通りと揶揄されるようになっていきます。

「田舎者」、盛岡地方では「ジェゴ太郎」とは、都会人の地方の人に対する卑下した蔑称です。元を返せば、都会人もほとんどは、都会に出るまでは、「ジェゴ太郎」です。これは人体の毛細血管と同じで地方の血流が都市部に向かい、その血流が地方へまた環流します。その血流が悪いと地域の健康が悪化して存続が危ぶまれることになりかねません。

そのためには都市と地方、地域と地域というように面として広がっていかねばなりません。「点」としてではなく「線」そして「面」として広がっていかねばならないのです。

個性を生かした異質の地域の共生が、地方・過疎地・中山間地といったことばの境界をなくし、各地域の存在意義が見直されてくるのではないのでしょうか。

その交流の一翼を担うのは、地方の技術

てなれる50の言葉

.....

集団である東北地質業協会の会員ではないでしょうか。幸いにも当協会は、都市部と地方の会員が、共存してお互いに個性を生かし切磋琢磨しております。会員の発展には、先に述べました交流をいかに盛んにするかにかかっております。都市にない「土着の田園都市」の創造に向け頑張りましょう。

年3回の機関誌の発行、協会創立40周年記念の米長名人の講演など、会員のみなさま

との4年間の協会活動は、私にとっても楽しい思い出です。盛岡在住の父は、昨年5月に、95才で他界しました。国鉄の鉄道技術屋として、生涯、東北の骨格鉄道建設に携わり、東北を愛した人でした。盛岡の近くに住み、最期の親孝行できました。東京にもどり朝夕のラッシュにもまれながら、ゆとりある豊かな仙台での暮らしを妻とともに懐かしんでおります。

